

冬の白解



冬
の
白
勺
解



序



水鳥文庫

芭蕉翁の俳諧心風体をおぼらむるより
貞享乃冬に日成始と一 元禄の流る
善に終る也 之百有年以はまはつれ
の人の世に中よ祭るらひ多し部集と
昔世に強きやいへとも附方の意味は
深長なるも其意の解き難の人多に
和氏玉君光をおぼらむとく女意なく

史簡の隅に三巻を徒の留急の巻と解す
も阿らんしし帝は道み情成方しと實
を左と成乃之集を志し以虚作八晋子う花成
多よ家ものうう壮年の以ふを地をみ
をせぬ数年終り師に睡成破る水との間に
おも飛成むを先古お成尋何くらしれと探
拙き也成總し一毎古集の端し一千う地
と何をも白解し一袖中よせし一表或人強

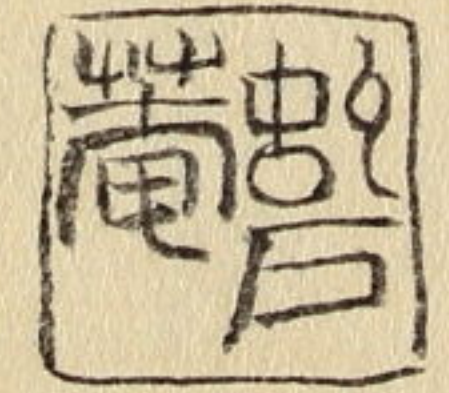
と梓録しと世はけをもいへも頑僻の解
かきえ鷲北嘴まわると鷲の眼平見ふ
けらもまはけの愧さけし一そ阿らさ
大一あひまのなみぬとて解し一と止め
三巻のうす先頻に集あきと破成道
を撰させるとけらに定政印の如し
泉松山聖廟姑棊孫川若流子短お
阿し加子の集成道成地及乃重能

先多乃日能新を仰せ郡木
榎と題し一と自序し一榎木と刻と云
ふ一と識みぬ乃互と誤の趣あり
也

寛政乙卯夏且月

此戸菴

素綾編



夕乃日 尾張五款仙

① 狂句のニま
おき次へテ
又ルへニ狂句
ヨミニ對ミテ
一白工へ公
ヒカノコトハ
竹ノ外ナ
人ニモカシニ
タカト
① 狂句のらし乃乃ハ竹森子以る也
芭蕉

此句破居らしの記りよ名權を以てさすのゆ
楓吟すと何ぞそ真享元年仲冬此句れま
はる雨よほそらと紙衣は紙よも老くりよ

紀りのあまの貞享甲子此秋八月江上此破家
成なるは〜〜此秋大破を乃比より風の吹志と
はとや可きあるは〜〜又此出は〜〜
置し〜〜此可き對し〜〜し〜〜し〜〜
りし〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
のう〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
下し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
後とやと〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
野水

後句のまゝ茶残さ〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
あり〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
の〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜

いさよむ

凡雅人ユハ
山茶をニ目ガ
ツイテハイシ
タイコハロヌ
ヨキ酒ナドヲ
ツクリ並テ
凡雅人ニ吞セ
ホムコロシ

有明此ま〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
た。と。通音なり

し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
多た〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
有明此ま〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
あまの貞享甲子此秋八月江上此破家
成なるは〜〜此秋大破を乃比より風の吹志と
はとや可きあるは〜〜又此出は〜〜
置し〜〜此可き對し〜〜し〜〜し〜〜
りし〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
のう〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜
下し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜し〜〜

極より初お舟の趣向しとあの人々
んそおやりに見ゆきたなりき月多摩
見ん侍

あうか運成格了詠る月面し 杜心

あ引かろり黄骨お月指歌し
見ゆすさほあえし

隣 さぐし 杜心 町よありある 重五

京所ハ渡キミツカヤ
あそらきの月詠をいふより御所ありの人
と見習なるをいん張りありあまき列侍
又はあししく有詠しと今名近衣の人

も法所ありおお目まきとて法を全
多ういよ色を多結に見ん侍ん

二乃尼平近侍の身おまき 野水

ありおお人のあまきくは女まきとの二老
乃尼平ありあまきし方けまは乃人
詠念お中子近衛乃あ成すと法依に物り
いふなり西の橋の詠めも近おあ乃系橋
昔々ゆきしをなう

蝶 ムカシ 冬 世盛長 鼻かむ 芭蕉

白きくは尼のさうしとあこれとあひな

又天子御術
の住信信が
あし女
の住神せし
をこの尼し
以次子法
新せしを
三の尼と
るしを

すゝなりり 確う丹雲北清水の宮寺より三
所更れり道より水はくく 女時のおもぢく
てと無名抄子足之竹色と其後家祇の欲
ハ確う丹の海の家といひ侍人たり

ひまぬおろく 其理がまほしく水田馬 存分

及人遠寄りの竹 疎遠はまれば色平介と
そ境多き誠詠さくちも高祇のおくし誠
作ふくひま後くくくくくく

冬枯のまろく ぬり唐 菅 野水

海鳥より管く 冬枯北系は鳥のこまく

と又入侍御くハ 菅残さしたふ下るへし是
孤雲獨去との類なるん

あ~~~~と 碎しハ人の骨の何 杜玉

菅の玉所残化時なるん 人の骨なるん
あ~~~~と見えゆるいすの

馬絨ハ胡 馬絨ハ胡 重五

中花ハウラカタニ 毫甲ヲヤク エビス エニイカノ甲ヲヤクカト
骨の何と云ふま 糸絨けけしや人ハ骨ニ
ハ河ららハ馬絨の甲ヤリ 後馬絨ハ胡西花占子
用る物なりと 射したるなるん 中朝鹿
出鳥の亀ト 類なるん

蘇や木横がすくおのこし多き人撫なはん

牛此迄もぬらふ家の夕暮り 芭蕉

一説ニ牡丹花青柳ニ牛ヲ愛ス是ホノ人曰クヤチチニコソカ

琵琶弦好く今より白ひく牛よあそく道邊
せし人好く人弦思ひおこく牛弦あそく此は
らん或人此神中集よ今う若の吟うとく牛弦
あお款も

我のまじしも弦じとやほよん
あよあそくもあのおらうハ

今う若天智天皇女末乃皇子とては後玉考

筑下鞆のうを弦つくふ 杜若

一説ニ米ノスラ
ナキ國ハ魚ヲ
布シ施スル事
ナリ

牛の弦あふとりてより室の八しよ此仲たも
よ移しし多しん室はあしゆき下毛佐野の
北太平山乃禁れ鷹大津中弦つくし室はあ
宮大の神ハ亦好あ咲耶姫こは聖三輪の神
あり無戸の里よ今く焼失弦あちりひれ中
に大久出んのもよあしよあより糸の巻し
はと中とあや上吉其の色よ鬼後そ人れよ
弦とり喰ひしとなり仍人のよえあなりよ
弦つくし負弦つくのそよ焼く門よ置し
よりそのはあし弦つく人のよをえん
さりらるとけ思失ての後よ其場よ鞆
弦焚れ備しとそ

秋の志をとりよ

ちもほろあのもろはやりほよ立ちあり

たのふれしちつなほし焼ん

そきより東よまうくはれし成のあしや
いひあふせりとなん室の屋し向神の氏
子ハ星くこれしち成すしそ食せんと
縁記よまな成すもいひ侍人侍し

我いの里明つたれ星 孕む毎く 首分

おれしちのうをいこらる成子なる女人の神よ
子成中れあくと見あそく神前子成成擇と
或は一七日改食なとしてより満する夜の

霊夢のめかれ星化現して胎肉よへいと
見しなほとまゑ星象ゆる他なるし

乃 眉かまよ 野水

一逆ニ君ヲ子ヲ妹ニシテ

夫故ニ客類ニツクリ行ト

星成もしむへとおふ人の親なる妹の
肩より子作りしつるなほんも田舎よ
何し次京師の人のしよまへ給

綾ひし君 湯よ志賀の舞濱 杜玉

一逆ニ君ヲ寵愛ニシテ

絹ナドニテ水ヲコレテ風ヲ湯ニシテ花ノ座ニ水ヲコレテ花ニシテト云

眉かくしあしり浴する用成見知したるなら
ん白伝志賀の山あり成若丸若よ後入そ
浮しなるあま成後若あうけなほそく揃ひ

とらふなりりり成居湯乃御所の余情也
あゝん

廊下ハ糸の糸一護掛付タタトはくふりり 重五

二返ニ
卷十上巻ニ 湯取つふれ廊下糸のけりくは
るふ糸をさるものし

其二

あふしやうま

壯年のついで
初秋の夜

曲江對酒

杜子美

花外江頭坐不帰。水精春殿轉霏微。桃花細
逐楊花落。黃鳥時兼白鳥飛。縱飲久判人共棄。
懶朝真与世相違。交情笑覺滄州遠。是非傷禾
耕衣。

あまの詩の意味は含みん 野水

神宮みよこやうししも終るる帰

初巻ニ
在ナカ 前中此志を致仕しし中此勅成道人と
勢いともあつた壯年放道りしとふり
年くは降したる川宮見お怒り以世成勅
人のよしとつる能なり

澤庵和尚の歌子

やうしとたかしくぬえのてし言を
りつしとえさる方をうらよあ歌
は歌はえんはよあひひゆるん

霜 ^マ ^ガ ち ^ハ お ^ハ じ ^ハ え ^ハ ぶ ^ハ 阿 ^ハ 乃 ^ハ 食 ^ハ 杜 ^ハ 玉

良句此のうら歌けく對しあるかま
ら口歌知るといふより未この字感係し衣食住
乃對ましくさよ衣袴子食住ハ言歌の降
比まて草の蔓垣工柱多る多花をよ何ん

聖業まてく多つぬる蝶のお折進て 芭蕉

我れねのほるまおとらへ蝶のお折進て爰
やうしとたかしくぬえのてし言を
るさゆましくん御妙りよりは中三冬子通ひて
秋布まよく移りたじん

鶴 ^ウ ^ウ 車 ^ハ ぬ ^ハ お ^ハ 乃 ^ハ 荷 ^ハ 子

聖業まより又出しく鶴おまてく多け低く
らまよ〜地成するもねりまてえそのね地平
遠く寄く残るう〜晴しといふより車と
ろの〜し〜事あれと無ししたるねん
おけらハ晴しといふより都〜西のハサニより
まららす〜おらま〜葉のた〜言業のえりま

あゝろ乃もろきあのらしきまじりし

廣う月神平羯鼓吹鳴らすん 重五

車よきつろく遊すく成上人の集あはし

森むとまねる 貞徳乃 蜀 正平

唐といふより貞徳と又智といふなり貞徳

松永弾正の孫まき連次よきし九條玖玄

乃貞儀を傳りて花のやうり自七頭唐

と号しし隱者乃富貴よき落かよ五園あ

莊まじしとなり梅園桃園芍薬園材園芦

此皆家あはしけ句桃園の趣たらん

雨あゆる海香の田螺ほろろ 杜若

芦乃皆家あは泉あは海香の浪より多しと

吟物すはなまじし融の大匠六條ああま

乃しあはるけ織し孫ひ難波の浦よりけを

汲ませそ焼せしむと中興よきあ御鏡あ

るああの子井あは地け放けの子にらる浪の音

残るりそまひ或御隠館の色よま平ならんとあ建

大貞徳の風流さよまあまじしうい通音まき

いめとよむししとまこくめと清く等

真如まあはるけあはたあこれ 野水

一後三國英史四ノ
江戸葎原ナトハ
遊サコララシテラト
ミハコ漢吾ノ田螺
ノチテ障ナク
ナトニテテ國英
シケテナクトシ

田中しの如月此等成事と思ひよせり人
情は縁しみちのれくろも思ひ出さる
此位はななくとあり

身事あつて決まらん徒力むる男 首了

奥乃如月成事といふより陸奥老の飯塚
をえんしそ田舎客の言葉なつてしく床
更る道許合え困れもく殊に從背なり嗚
の中よそなごの成信二月の何よ力なかりし
あつたやなんといふ成事そくたしめく成事
歎くさる余情深しむ成唐詩五絶長
井の向もおとい寄りとくし

縁さる多け乃恨殊しし 芭蕉

從方因事といふより幼おはひひ名つけの中
れりし女のわづらひよのハき成ハ親合
逼る責ら達し成縁妨となつてさる根
情さる何んか

口あしき痛成ちさる力なき 野水

縁さるさけの筆より秋添の年深なる男
乃く入る鏡子向ひあふこ面中の傷を
折恨ちさるらむとやまてに縁遠く成
悔歎く余情なめん

聖^ア日^スを^ゾ歌^フり首^ヲおろ^スせん^ト 重五

一逆ニアスハ打死ラスルテラスン敵一首ヲトラス時ハ痛ガミクハシト

口^ヲお^しと^スる^ヲより^ノ歌^乃首^ノ痛^ト又^ハお^して^ハ
此^ノ首^亦お^しれ^ル子^ノあ^りて^ハ各^々心^ヲ
残^ほく^せし^とよ^と亡^君を^も重^クへ^テ向^北に^後
打^擲し^しく^おを^も歌^ノ由^縁へ^送らん^とす^る
死^すらん

小三太よ^も重^とと^しせ^おと^りん^に 芭蕉

歌^ヲよ^首送^{らん}と^しお^しる^ヲ凱^陣の^執向^軍中^忠切^切
の^歌三^太小^三太^がと^いふ^大將^乃傍^方去^る次^次
乃^差長^老へ^大重^取り^しく^者工^汎ふ^は情^入る^る

と^し

月^々送^の死^牡丹^ぬす^人 杜玉

名^取れ^るん^日さ^らぬ^すん^と男^が人^のお^お
を^情し^にを^音こ^そ淫^乱舞^の大^名さ^あ
此^乃ち^池よ^益む^し月^送の^送と^魚の^情な^ら
らん

獨^獨の^のり^を破^聖あ^る 重五

鞠^場は^色牡^丹の^笑而^益人^の害^すり^かり^け
ハ^破聖^ある^と信^じる^も余^情さ^らん^と
と^スへ^信らん

お川くしとあり地蔵祈所 所 高令

鞠ののり有り大寺乃の所ある工の趣向地
蔵祈 白仙余情作し

え川 新此世とや要のいう久しく 杜匠

石地おより嫁をえ移らひて聊快の心珠得
て人の并れくろたをよぶ致親くん鳴呼花
のせとく致を致おむは親ひ衣服致飾いめ
しと来よ要するまお夫の未ハ皆は下く石地
蔵よりたも の致と親の致致タの白骨と親
怒し みる余情甚感作し

禿いくらう乃 夫らうかいゆふ 野水

一後ニ前白ラ遊セウケキセシタニミル
多ク禿ハクマ
ヨウクガクノ昔ラ
イラトナシニ
セ子ハナニスト
云コ、ロシ

嫁と禿の并れくろたをよぶ致親くん鳴呼花
の子と年比とて嫁のたうく人よのしつ
ふき又扱員おう賣らまきとる禿ハ笑まら
公界のころをひやすらんと志し憐み情な
らま

根おより 餅すやる室はれおれ 高令

禿は又くし傾城の配餅室や化粧部をよ
飾るなるくし是蕉門も木子の飾ハは白と
致手なとすへふものる

その起し其の端と母しし事芭蕉

餅すや室とらふよりそは其の句又也し

侍らん 女ノ所作モナラフ云々モトヤ

以條深く枯る村乃 葉ささおし 野水

常のよさし、味のはと尺智其栖るは條深
く道の村ハ葉ささし其の枝下はさ
冬枯の葉もなまし

三味線かららん不破れ 買人 重五

條深き所より阿達こるる破のつをア生し

勺他ハ旅藝者の切手持をねと傳たし其語
よ美人よ三味せんささらんささらん
七途旅三味せんのかささる余情なまし

道すのらよ其濃くささる其成なる 芭蕉

一説ニ其名ノ一ノ思キヲ来テ関上モ知テ通リヤリ同守ニトガメテトヤト

三味せんは其法は伊勢其部にも又也し
よ其わなあり其ささの勺他其部ハ古又其部
乃名あり又其成よくおししとなり

孫ささくこれ侍て其の七十一 村玉

是ハ老人のくへよ尺智ささらんいさな其
立も其なりなまらささらんしに年ハ其は

ふきの小せ十文の物と靴と靴を何なりも可志の
よとふを成おとろく情なるし

奉加召所堂よこみおしあひ 重五

老人乃情より門跡の奉加乃趣向言話頭と
又くあを念のる知なるん

おろ川の笠比下こころにさか 若き

奉加金細の大留ぬさぬは大雨降れど
傘の敷成をこしお傘よこころにさか

蓮池工跡の子おふ夕暮 杜若

傘さし通了道の色の池の跡の子雨をひ
蓮の意葉の下はこそそよめお傘のこころに
似かよひいまにまかせお傘なるん

膝マドまつあゝくすやう成 瀟スキ野水

池成前を掃くまのり成すく書家志
余情風流流るるに

月子立てる唐輪成髪乃赤の池を 若き

唐人と又定る唐輪のまとうたる成月子
髪赤か池髪義子などの侍若き

一説ニセトミテ貞セツ者ニテ髪成カマズ傷クヲ云

恋せぬ砧 臨 濟 河川 芭蕉

後二前句直せ入恋せ又心ヲ砧て心ニ恋ナリ 待ト云ハ臨濟宗ナドタトキ傍ヲ待ト

髪の赤の手多ふこといふより 臨濟禪師此
母と又留るる竹をくし 漢土のなぐみ子と
ま玉こけしまや子成るまを 棧成穢掛衣
しそく衣服清うかや 調へ玉く清くさり
臨濟の母玉く思を深く 送ひく眼も泣
つふきしと世人云傳一信

江湖風月抄大義渡之篇

濯足機先被熱瞞 黃金之義鐵心肝
十成報德酬恩句 萬古一江風月寒

註曰

黃檗暹禪師得道後忽思省侍父母師住到閩中一
婆子出問何處來師云江西婆云我家亦有子在
江西多年不歸師因借宿婆親為洗足運足心誌
甚大婆失記是其子次日運辭去於三里外說與鄉人
云吾母不識山僧但母一見足矣鄉人報知其母母起
至福清渡運已發舟一跌而終

禮戒翁有頌畧之 黃檗稀暹禪師臨濟傳惠照三

後二前句直せ入恋せ又心ヲ砧て心ニ恋ナリ 待ト云ハ臨濟宗ナドタトキ傍ヲ待ト

秋蟬乃 虛子 野水
此夕禪師の 大悟の志成云依し
多るりしん生る蟬の 声より 虚工秋風
此夕何るこきより 他より

系乃言法ふ系ほつちり 重五
系乃言法ふ系ほつちり 重五
系乃言法ふ系ほつちり 重五

袂ツモトより 硯残ひし山 隆子 芭蕉

系乃言法ふ系ほつちり 重五
系乃言法ふ系ほつちり 重五
系乃言法ふ系ほつちり 重五

おス典侍の局、内侍、杜玉

山隆上 双成 石くといふり 小原御幸の材工
又 翌々るるまじくし 文治元年五月朔日 長樂寺
阿護上人 仰誓 御誓戒の師も 女院 兼 典侍局

阿仲の内侍法種在りし 四年九月の末 草太
山居 文治二年四月廿日 後白川の法白 小原上御幸
万里乃 小路中 納言殿 御執筆 所也
御製

地乃川よけのさくく 教しあそく
信のむらり 所より な 梨乃 純
余情ハ 女院 典侍乃 局 山居 上 出く 控つて 凡本 推
なと 系乃 入 係し 此乃 平 系 御 語 工 委し
仍 里 有 ず

一 後 三 月 三 日 鷄 合 三 本 上
ニヶれ 系 鷄 鷄 尾 七 乃 多 軍 重五
系合のニヶれ花ハ 既 向るく 系 軍 の 白 化 也

むとをきりこころあはく山鳥の付まゝ余情
こゝろらん

北國無中カ

あはらかこころむ鼓の獨活川 首分

ちる合ふう三月三日越路の獨活川の神さる
かこころむ心神の聲とも去人の聲とまゝ云
かろくかろく余情限りし

其三

杖杖

むく

僅に十歩

はくこのひさし月より 高可敷

杜玉

俄にさるるあやむいと十歩もさぬ
氷くましく降をまきえへし月如く
連つて杖敷のおくをふに然しと月
とくあすく履ふゆき

氷多しり 氷は箱 つか 重五

此処打氷を射の志を天地敷氷月と箱
つり端り氷の切手破る杖敷よ氷はつ
まし八廻りたる

氷にアラスカ 氷下、氷、ウコウラ 福ツマタトヘシ

遠^レ原^ダ乃^ガ茶^カ改^カ神^カ狩^カ人^カの矢^カ子^カ負^カ々^カ 野水

正月季節

氷^カか^カり^カの^カ神^カ狩^カ人^カ此^カ靴^カ履^カは^カん^カ遠^カ原^カ改^カ
か^カり^カる^カ出^カす^カる^カあ^カら^カる^カし

小^カ浜^カ御^カ門^カを^カお^カし^カぬ^カの^カ茶^カ 芭蕉

勅^カ改^カ茶^カを^カ出^カす^カま^カと^カ此^カ狩^カ人^カと^カ又^カく^カ御^カ門^カを^カ
お^カし^カぬ^カと^カな^カり^カ都^カを^カ四^カ六^カ御^カ三^カより^カま^カる^カ
と^カい^カ言^カ茶^カの^カと^カし^カり^カぬ^カれ^カを^カ何^カも^カ見^カぬ^カの^カ
た^カし^カり^カぬ^カあ^カら^カる^カし

ら^カ茶^カの^カか^カく^カ扇^カを^カ風^カに^カう^カち^カ覆^カ 首^カ行

門^カ前^カの^カ茶^カ地^カの^カ形^カの^カ板^カを^カか^カき^カよ^カす^カ
其^カ風^カを^カ吹^カ立^カる^カ茶^カを^カか^カり^カす^カむ^カな^カり^カ

茶^カの^カ湯^カ者^カあ^カし^カむ^カ登^カ志^カの^カ多^カん^カほ^カ 正平

茶^カの^カ湯^カより^カ思^カひ^カを^カな^カれ^カを^カ乃^カ茶^カ改^カお^カ
む^カ茶^カ改^カ此^カ情^カを^カし

あ^カら^カ茶^カよ^カも^カの^カ讀^カ娘^カか^カし^カつ^カむ^カ 重五

茶^カの^カ湯^カが^カよ^カか^カし^カつ^カく^カ娘^カを^カの^カ讀^カと^カ可^カき^カん^カ
利^カ休^カ此^カ娘^カの^カ情^カを^カも^カあ^カら^カる^カも^カあ^カら^カる^カも^カ
又^カ三^カ茶^カを^カ茶^カ改^カは^カり^カし^カけ^カ良^カ登^カは^カ六^カお^カと^カ
ま^カり^カり^カ又^カ鶺^カ鴒^カは^カ八^カ夏^カ臘^カ改^カ何^カも^カあ^カら^カる^カ

爰母てハ鶴大なるべし

物々電事しつ川上は情くらふ物 柱玉

二人の田力と思つるも 女はつれなきと云ふも
れもひさこめぬまゝし 上代は縁木の露敷子
思ふ女の心よ物々絶代絶しとやう 奇林良
枝よんぬる大和のわつし 三寸と物付も何んか

あつ秋れ 角力ちのら 秋えい 池た 芭蕉

情くくつとつて 秋葉と秋とのよよえまゝ
蔵くくく 白化せし 秋と秋といつて 是かやう
来たる物な 神とあのかうむ 秋は秋よりこふ

まぬや 秋のふり 秋屋かたる 秋葉をいはずぬや
いはし 乃情とまゝのわあてし といふべし

蕎麦さへまゝし 遠^{シガ}来^{ラキ}の 坊 野水

秋の涙不いふの 秋の坊の危なすし 秋の秋を
たす^{アキ}ふ^キ 遠来^{シガ}の 秋葉をいはずぬ

秋月夜 雙ふくちれ 遠来^{シガ}し 天^ラ 柱玉

秋をんはすこつちの 秋葉をいはずぬ

秋^{シガ}粉^{ラキ} 為^{シガ} 賞^{ラキ} 及^{シガ} 且^{ラキ} 遠^{シガ} 来^{ラキ} の 秋^{シガ} 葉^{ラキ}

秋葉の涙 立けらば ちうん 上^{シガ} 葉^{ラキ}

刈入田植の意中より農家の昼飯のそと
中より亦も取給成買まて乃業まてくまの
てし思ひしそよ又泊りけり双成打く多の
しふ人もまよとてふ付なてし

忍ぶる此業とて能成ゆり 岳 野水

世成度くりをそおぬる買人の世成意
浪人のさうり居くわりなく能成もよ
遠ひ付なてし

命婦乃君より 茶まんてあす 重五

浪人の多つきなまよ由縁の命婦より時節

此世のなとてん成るもなてし

海ありて津浪のぬいさぬゆふ 荷今

茶れ抄く地成津浪のぬいさぬゆふ
とてし部そは地成雷乃らるぬ
まん得るもとてし

佛吟くると矣ほとふ 希の 芭蕉

讃州志度の浦長岡此作平惠空上人乃勤
まてし心念佛此行者となり或時志度の浦
津浪ありて法よりあせ多る鯨乃後より惠
心の他は臨院併成得くもといふなりありぬ

一白いこゝあてもなかりあはれ哉の憂る乃哉と
差あゝるこゝすすあまう

店屋の松枝詠くあまうぬ 荷方

矢刻の眉たるの店家の空に中興せよあま
きしし松もく旅人もあまゆ哉あまうんし
も其つ松の喜保年中此比鏡先たしと我子
あまう其つ松と對しと詩より連句のあ
つらうしなうん

すてししは柴州あま伸はらん 野水

店屋のよ川枝詠くあまを相奇なま

上のふとんかしたるあまうん 妹のふとん
まふねの沖製女もあまうん

晦日^{ミツカ}我をく刀賣るあまうん

是貧者と見えく貧子過る我捨てもな哉
堪あまう年言れあまうなり車代傳り
し刀我も賣るといふなり此ときくの言葉
風物め眼あまうん

雪^{ユキ}狂^{キヤウ}乃國のいさあつらしむ 荷方

あまうつらしむ名刺我なり此刀も賣るあま
風流の道人とあまうんあまう人の詩を

婆羅多花とつゝ花枝指揚路不付くと連系良枝
コトヲ

三日月花とくくくく鐘の声 芭蕉

初と一のけししは禪乃果なるもそつ色れ
時分さ日月は鐘の果なりともあなりし

秋 湖うすま 琴 水乃 野水

西山の音月残詠東の吹渡残さく湖去の夜
舟着残をしきて 琴のひささうあつらん

煮るまゝ 残ゆししと 鮎をむき 社
舟興尽に帰ききに 鮎を放といへる 是放

一返 琴の音感にて殺生ハコトヲ止ムコトモアリ
會

多よま 急佛 及ぬ残あつて 残
隣の急佛は多よまの心と思へ負残放
あまらならん

一返 今宵忍ぶアト天念仏ナトニテオキテ他人ニ見トカララカト
新しむおひ 野水

孫その身しぬれは残を佛多能鼓すし
それん同くアリのの 鮎を放ふとつ女子
取ら余情あらん

田の川 水乃 帯心く 重五

わさ母くし諸なん忍ふ命くいひおれさし思ひ
持し見おしこお思の帯ひく情なさん

この世に死なば魂美 志と花平入 首字

一強ニ花 帯ヒテ附トシ

後乃帯ひくふおより西ののよま北面の女
まよく在る時を足おしこ強れを幸平
うししもさたあし

西のの款

福かいくま美れもらんこ美死をえ
そのさあらあ乃もち月まら

二句一断句

昔れあま乃日残我もたれしく 芭蕉

西上人の釈言此涅槃の日残方乃餘強は強弱せし
たの事は大意のあも又その望れ日残と強ふくつたり

其四

たうたは津まきし

あくをすまあ
とまと

炭賣乃杖のり高きりまのり 兎 重五

あまに万善は人魔の奇
難は人阿しやあくをすまあ
たのりしをすまあ

童蒙抄のいふたはせと可きと如何はよ乃白此
えん銭紙子なるしもあるらん

人此化粧ひ銭のく美 磨^マ 寒^サ 高^カ分

我及白の毒平鏡を白つせく急銭を欵し実
は炭より大鏡磨の對しし職人欵合の例
よあるらん

職人欵合七十二番持

左番匠の月

おしなるとするもくみもらやせとて
サけすこ目此かこおけよらん

右鍛冶の月

新阿連くあるふかちわ姑を命はち

ゆりさけ九んきん月のはやと馬

又ね連欵

多うくもる種えたけとくしん^英 一蝶

世銭く此目とおもひらるるも其用

是も欵合のえんらん

英同振才三天地人ニツトフ

判馬骨^{イハラ} ^{コツ} ^{イシキドク} 杜石

人のけいひらあすり欵をまへて 謙上生あ此化
粧ひ白骨子や我並るのしとあそるを
が他りくるなるらんな我中をるり 味を
ふむもの

雀^カ見^カ秋^カ月^カの^カす^カり^カなり^カ 野水

荆^カ子^カ骨^カ乃^カ色^カは^カた^カり^カある^カ雀^カ見^カ了^カす^カあ^カたり^カ
至^カし

風^カ吹^カ也^カ秋^カ乃^カ日^カ孰^カ下^カ酒^カ形^カふ^カ日^カ芭^カ蕉

直^カ也^カく^カ雀^カ見^カ了^カす^カ人^カを^カ五^カ柳^カ先^カ生^カな^カす^カの^カ件^カと^カ見^カ
出^カし^カあ^カら^カん^カの^カ陶^カ淵^カ明^カ或^カ九^カ月^カ九^カ日^カ无^カ酒^カ菊^カ下^カ徒^カ然^カ
ト^カ有^カケル^カ主^カ弘^カト^カ去^カ人^カ酒^カ或^カ贈^カケル^カト^カ朗^カ詠^カ王^カ弘^カ使^カ立^カ
晚^カ花^カ前^カ落^カ夕^カ霜^カ鶴^カ沙^カ鷗^カ皆^カ可^カ愛^カ比^カ詩^カト^カく^カも^カ二^カ句^カ
乃^カ余^カ懐^カ尺^カ寸^カの^カ心^カ

荻^カ織^カの^カ笠^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ羽^カ笠

詩^カ人^カ風^カ流^カの^カ秋^カ笠^カ織^カの^カ衣^カ出^カく^カ不^カ連^カし^カ意^カれ^カ持^カす^カ
世^カ市^カ中^カ残^カ歩^カり^カは^カあ^カら^カん^カ荻^カ此^カ葉^カま^カく^カ蓬^カく^カ
笠^カま^カく^カ織^カの^カ笠^カの^カ衣^カする^カ

荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ

荻^カ笠^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ
ん^カの^カ荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ
く^カ当^カ年^カ此^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ
へ^カる^カ九^カ月^カ神^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ

荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ

荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ 荻^カ織^カの^カ衣^カ秋^カ布^カの^カ衣^カする^カ

是姑の情もくあかき^客と解乃来るや久しく音
信もたししなとひお徳頼らなさん

思ふこそ布摺う水にうきこく 野水

なつめしおもおほく我志うに汎ひきし
なり

うきハニ^{ハタチ}才^チ成^チのゆるゆる 歌 杜玉

たぐち越ゆる縁遠く魂帰のえのれもひと
入る地より方便ありはなさん

あてふら^うきこく移るる怨をたぬ神鳥 羽笠

人情の思ひほきさうり 怨をたぬ神鳥にちかき競ふる
附なさん

才^チ成^チの如^チ距離^チ亡^チ人^チ成^チ入^チん 芭蕉

たなまきこきさうり^チ亡^チ才^チ成^チの^チ思^チひ^チも^チひ^チと^チし
く距離^チより^チち^チ外^チ養^チあ^チも^チか^チな^チと^チあ^チう^チま^チな^チさん
何となく近規者た余情も何ん

門^チち^チの^チあ^チい^チ身^チ衣^チの^チり^チて 孫 芭蕉 重五

なうふ人成入むとあうせつてねせのうみ法うきて
つちの情もあうつてなさん^チ成^チ百^チあ^チり^チあ^チり^チ
むう

血刀かく毒 月れくくむり 夢の身

心も我多ううとあるといふより美人の喧嘩の場
我切めけく我を鋪の心で我思ひやうの起り
友の心休む心我思ひける伴我思ひしうの附な
らん

雪のわらうくか乃鐘七川きく 杜玉

是吉系思乃喧嘩しうきく此迄おせつ時を彼何
某の柳橋の鐘 寺伽羅の下殿えうのう工蓋ま
はるし

冬待つ 幼豆多くくたあえし 野水

此迄おより見出しう秋の末 鈴賣れあうよ
幼豆或ハ鐘はく寺おくうもえへ侍らん

美ふははくらの戀とすたれり 芭蕉

戀と更こつてドチトモワケ難キユハホット退屋
幼豆う 梅のあみ我思ひくくくさまの花
我思思しうもつ所ならん

僧をいひた 歎 冬 我 飲 羽差

思ふコトラステラレド又思ふテ茶ヲ巻ミナカラ思ふ事スハト
花の飲思ふより无言禅師をらん見出しあらん
聖禪石は色願もあみおのあはるは我全悟みれ
山次の流うあ我飲をすまふ子我唇とつ他り
あふふらん僧正遍昭うよ良峯の宗貞と申せし

一説ニ
梅は花かた梅カト
戀と更こつてドチトモワケ難キユハホット退屋

一説ニ
ヤマアキハ茶ニ
思ふコトラステラレド又思ふテ茶ヲ巻ミナカラ思ふ事スハト

時好色并なりりり帝后の女まゝく歎かむ此御
衣被御簾其中に在給宗貞けそりし奉敬御答
なりし其時

山あさの花をむねしや誰

よとそと入は口なりしよしこ

それより以來次山吹成いぬと祿那くせり

厚集良枝よも入へ給

上虚栗

山吹や元言禪師乃捨志李下

衣の醜醜ヤブキ山ツク梔子チとく染るも世なきハ也

白シロ燕ツバメ何ナニ子コも保山ヤマよの清浄乃地チと栖ト此コノ乃ナリ是シ

二後ニ
前句、
奉春テ
見テ展
テイシ

白燕如何子も保山よの清浄乃地と栖此乃是
大心ぬこの花は浮むれは清くなるより又出し
るるまゝん本草曰人見白燕生貴女故白燕名美女

宣 吉 買 く 釵 成 鑄 心 重 五

清浄乃地成入之と天子の御影首と挿人さしを
鑄了釵向今人乃及所に可く成

八十ヤソト歳セ成三ミ川カハ了ラ童コ母ハハ持テ 野水

天子乃釵を鑄るといふより 初冠御即位此賀と入
諸國より長寿の人を撰りて之を執向老兼子也
此侍又其之の長寿此人も余情も入へん

うえ

西行

世の中我いとふよてこそかゝるめ

うりたもをたしむるが

とよこく侍しうもれ世せうらつらひ

家我世し人ときけけうの者

あちと心よもあもあまを

と久しこゆこ重徳となり是れ口乃君の侍を

阿ふん

初瓶下粟我流ふ日始 善 善守

一説ニ佐理、故事ヲ合ハシ

爰よりくハ侍我平話よりしこ貴那く女乃日言
よ粟流ふる侍しとふんといふなり

たやり来々 瞿麥のさほ正月 杜玉

ハヤリ正月ナリ六月朔日ニアタリ

ナデシコ

粟流あ用より足せしこ六月の情なり月
鏡他々念情なりん

鼓多むけね 舟度り 長 野水

あつと
一射す

ツミ
大コノ

えやり正月喰遊よりを至風我陸奥の果なり
又出しく年々の言を神子を教ゆる能なりん

寅此日乃旦我流治ましく起く 芭蕉

并其の言より足今く刀鋸法の氏仙我祈石地を治ん
思ひまゝく猶其言の目其事のみ我流めく糸結す
るも理なる處し

寅ノ日、并、ナトニラムノ作

書 茅のいしむ南京の地 雨笠

南京を南都張のいしむる處し素良乃泥法
乃多く有ふられたる也書茅のいしむる皇
都の地なる不出崇敬しむる言葉なるし

田イガキ以難ししく誰とせむる熱人の像 首字

大細言御 百姓集 田に誰像と知ラト公述ハ
カクシタ
奈此の所より僅くなきこ田畑乃中土田難し
在は是也大田秀士云の御舎中大和納言殿の像
たも我々の前の農土も志る也此の如き詩も
志る也と云はれり多しなりん

大細言取ノ思ラトヒタラシタモシヤ
泥し 出ろり 此淨土片乃根 重丑

前の田に誰乃ほろり芥蘇たんと多くある所
なれ其地此所しむらひまきんの清土もあ
乃白ひ形もん

粥す 粒アカアキ 唾 花 野太

清き芥といつて我土種のかたなりしと書
記おけけあろ大我種ふ白ひなるん

狩衣の下に 糞ふ 糞う粉 芭蕉

陣中乃粥よ之皆大将狩衣出立れ下見着下
能成のふれ題為る屋妙能なるん

小の方なくく 以^{スラシ}廉あしやうく 御^{サシ}是

出陳の名跡致木し涙^ス入せしと愁し
とてうら見送る望形えし

痛くきぬ夢^ノ成せむはせくあ 杜^ノ子

あうと一対ナリ此ノ方長ナリ

むとく 森の若友^ノききし^ノ苦し^ノおろく
むく^ノ雨^ノ大^ノ音^ノを^ノ成^ノ成^ノし^ノく^ノあ^ノらん^ノお^ノや^ノあ^ノや
はぬや^ノく^ノ情^ノは^ノえ^ノん^ノる^ノぬ^ノあ^ノし

其五

田家乃眺望

霜月や^{カウ}晴^{ツク}の^{ツク}行^{ツク}く^{ツク}並^{ツク}居^{ツク}申^{ツク} 今^{ツク}分^{ツク}

前^{ツク}去^{ツク}あ^{ツク}ま^{ツク}あ^{ツク}細^{ツク}なりし^{ツク}雪^{ツク}田^{ツク}舎^{ツク}の^{ツク}跡^{ツク}は^{ツク}く^{ツク}
白^{ツク}の^{ツク}雲^{ツク}を^{ツク}赤^{ツク}海^{ツク}赤^{ツク}田^{ツク}面^{ツク}乃^{ツク}氷^{ツク}厚^{ツク}く^{ツク}晴^{ツク}の^{ツク}成^{ツク}角^{ツク}泥^{ツク}
か^{ツク}き^{ツク}我^{ツク}舎^{ツク}面^{ツク}を^{ツク}力^{ツク}も^{ツク}なく^{ツク}も^{ツク}く^{ツク}多^{ツク}く^{ツク}並^{ツク}居^{ツク}は^{ツク}ぬ^{ツク}
也^{ツク}去^{ツク}乃^{ツク}白^{ツク}化^{ツク}なり

冬^{ツク}の^{ツク}朝^{ツク}日^{ツク}は^{ツク}あ^{ツク}の^{ツク}進^{ツク}なり^{ツク}る^{ツク}あ^{ツク}あ^{ツク} 芭^{ツク}蕉^{ツク}

は^{ツク}根^{ツク}何^{ツク}も^{ツク}なく^{ツク}く^{ツク}冬^{ツク}の^{ツク}余^{ツク}情^{ツク}朝^{ツク}日^{ツク}の^{ツク}朝^{ツク}を^{ツク}
そ^{ツク}く^{ツク}く^{ツク}画^{ツク}よ^{ツク}う^{ツク}ける^{ツク}景^{ツク}を^{ツク}に^{ツク}し^{ツク}く^{ツク}あ^{ツク}の^{ツク}根^{ツク}の^{ツク}妙^{ツク}是^{ツク}
打^{ツク}流^{ツク}の^{ツク}鑑^{ツク}なり^{ツク}ん^{ツク}の^{ツク}矣^{ツク}や^{ツク}は^{ツク}根^{ツク}も^{ツク}く^{ツク}冬^{ツク}の^{ツク}日^{ツク}
北^{ツク}き^{ツク}なる^{ツク}と^{ツク}世^{ツク}人の^{ツク}云^{ツク}く^{ツク}は^{ツク}回^{ツク}なり^{ツク}也

程 槍山家の件テ伐木の葉

降フリ重サテ五イ

あゝの朝日を庭あは曙うし
あふの意我情
あふふん件のを眼にな
伐才三留を添く心我
つけく感味すつきせのれ

飛ぶすリ牛 ま塩こね我はく 杜子

寔山家の塩ふ自由曲く
海色幸く牛は運ぬま
はしし連舟の習く端白けつるま
うたのうた
程強ううと未定く
伝せと是能考のつる
ぬ

音もたよふ具足り月たうあくと 羽笠

夜ヲ字ん
軍兵ト云

爰かく陣屋の粮場とて人習うるなりん
ももり
としかましく
本具も品飾重り
斗と又へ
伝るん

的ヤ とゆりハ 葉 切みりて 野水

血赤の酒宴と競向
伐定大将
伝方の童仰の甚
活んとす
白能
せし
ま
情
な
ん

秋は比族の御連歌いと仮平 芭蕉

雲上の童とス
啓族の御連舟
唐よ
活花

借借心心かんかん

湖晴くふさんや秋 寺 菖子

夏子とて御上流御下白岳澤遊行寺に在りて
向の御連歌なる人

年シキテ 横シキテ 杖の花の影るまき 杖玉

寺の庭乃杖乃杖もろく 影るなま

葉子いと色お残深丸の色 重五

葉色ト赤残深ヨトふ白をいと地力云ひうけあまの

杖ノ杖竿此余情も何らん 巴三廿代、五十三モル

籠子追下鳥帽子の廿五五三十 野水

葉色の系より鳥帽子の結と見え今も義仲の理遊

に巴山吹下鳥帽子冠せしは奥の侍なりん

危子木曾此はこひのうす衣 羽笠

是ハ近江代下御大家なりと凡そ東海を或は木
曾政の系を御着るは縁をなして趣向なりし
事の籠子追の興より言たる侍なりん

夏山シキテ 橋下片丸らん 葉子

涼山の作を物しそ山橋のを咲はを撮えん

いよ白心なるん

麻川とて子歌乃集りて 芭蕉

麻州より一より寄るはちろ^ね神も山橋に梅は人よぶ
机袋の志より集阿む用成えし一もあつらん
芦州麻州なりとく之集の標題も能く
そのよるるもや

江我近く獨ふ菴とせ我捨く 重五

新の集阿む人のほろを湖あ乃色と定
たるなるん

我月出よ并ハおほくそまれ 杜玉

度住此人我え智く唯我し念は禅法或ハ
師字款よりと懲るるそ心方月めくうや

思くささきとちんらん

旅衣笛子^{一返ニ落葉トアリ}存む我すらん 阿豆

^{一返ニ月が生ヌエ道がクライ}
書の上人の影のも影をまより笛よそく我
度るなるんを我を好むん我自悔め情も何
らんら

籠^{ロウゴシ}輿^{ゴシ}ゆりす 木^ホ瓜^カの山あひ 野水

^{惟盛重ヒラノタカイ}
後よそくも流人とうる智く松塔と輿の中
も神屈なりんと守固の衣まの情も我
すくもまららん

骨とくそくそくろくお流く^{ウチカエリ}百あう 芭蕉

一説、ある人か親類ノ死しきり泣き見テナケルト云

本氏の山吹ひとつて我化せと云ふ人々も縁此人乃之記なきを思ひ出して泣況むさるるらん

乞食を蒙るをさうあまの〜人 昔今

骨我入くと云ふより 完結塔と云く妻の非人に賭しく形はらしの首を蒙り包番子葬らんとす〜金情なるらん

泥のと〜平尾を曳鯉我拾ひ得て 杜玉

貫ひ裏の用我入留くあ田上りの拾ひ鯉を包ざらん

行幸ユす〜むの御〜 重五

美濃の養老乃瀧らん〜の行幸と云出〜活鯉我奉余情なるらん

殊子照る年此大角豆のむら〜 野水

天子への我造め奉ると云ふ〜近年覚れ甚堪〜と云碇置ると〜他の相代も〜と云〜

萱家ゆ〜らに笑ふは〜 白 ねま

垣穂つよたさ〜けの生〜ゆ場我入工甲ある向端〜し〜市平の端瓦が〜と〜人の旗〜垣も〜え〜ゆらん

糸囊尼の少坊す〜した〜ち群〜 首子

大谷屋の遠勢迄比血尾りしつ住まふらん

折一説ニまゐる蓮ル、トアリの 実トアリ蓮の実 芭蕉

花花モもウツケトモ 椀物に及ぶとて 芥子と蓮とみくら
付付なるらん

深さ下飯大寺ニヘヒツツリト基のそく月大寺ニヤ志お 重五

蓮池より大寺の飯大寺ニヤ基座乾涸のちる月大寺ニヤ浅
入生しむらん

露露置く 狐 風 やりしよ 杜因

飯基を取しハ飢多し 狐海ふひつ 喰ゆ

尋他ならん

釣材に家お白根ぬきしる魚片 鹿ヒカシ 羽筆

狐お白より山家の片狐ガトリヒマリ底とて今秋の末農事終り
漁料を別と申指成小縄お白し釣る干場とて
らん家根丹も釣る干道ならん

豆腐はくろく母此 喪平入 野水

片底の家成喪家お白の居るらん 喪家言代續お白とて
更極く片底お白は造りしものなり 関東お白に在るなり
きこと大和の國お白なるとは上代か遺風お白もくぬけなり
公員家お白もくもく者有れ 續成解お白とて喪中お白就居

りう 袋中の論物巨書他も目下らん

元政の子此袂もやきぬるし 芭蕉

母の愛も今人哉涼州の元政とらん定めん誰法
海に甚母も孝信りて人ましく母は侍い力也山王詰し
紀り此詩歎せよこし 凡流類文もく法美
一派の少人行状に隠逸傳もも又へ信

伏見木幡の 鐘 志保う川 善令

元政の月夜政あまも此後より伏見木幡の
鐘にもの寂然ありもんようの心も政う川
とを何う多うらんらん

志保う

山寺の志保うの中へ政あまも
しうり何ひの心にもや政らん

名保うの男 猫空も月を捨てるく 杜玉

鐘美哉う川黄昏 政あまも此後より
しうり猫とおもしうりすもも婦人の捨かん
信らんらん

美志保うの砂の 志保う 掃子 年好 重五

猫捨かぬる情より志保うすれをたすは御所の
命婦此仕下政らん余情らんらん

水干成衣 白の （聖） 着やう （芭蕉） 野水

き掃を鞠の吹り此掃除と云替ま指衣成衣に
芭蕉の木こしし急白子射しと贈答乃白ひに
らん物とく挨拶の芭白ひのせに此格と云ふし

山あふ 白ふ （芭蕉） 本あらし （芭蕉）

（芭蕉） 是な成衣子あせし賜尾の掲白なりん

追加

（芭蕉） いふた入よ少しはれふく牛成うの敷

敷の人此眼成候し兼子面をくいうよ是よと云

降きとも牛と吹降よ打さ成つて思ふ
人といふなりん （芭蕉）

檜火にあらし 枯らし （芭蕉） 松 高き

此振牛追の雪をふるくお梅の白く奥州金津
ひきとらう 蠟油酒乃類成余因内出す牛の十
何事りも連工追く何地あくも牛の雪をか
はるをを詢の度と云牛の成候下あらし外牛
追ひ飯の成候家工芸としく世月くる下工を
夜を枯草なりしひらひ集く焼つし海名屋のたす
あらし成候し休しあらし檜の梅なりし
吾外牛の起るよ成候しあらし成候しあらし

市井年々好種の高部まゝりてくまゝく見ゆ

木城川下流工後伐木等して 皇五

後より志誠轉して樵夫工阿あき神より
見ゆしある木城川なるてし業人既あき神も其
業もわくもて神もあき下流に^{テ、ラ}てりやの
破爛伴なるんか

柗笠丹之高伐や月すれ つか 杜玉

木城川を草刈の山海よりあるなるん山海は用
明天皇の皇子よりゆしける時玉代雅政意
路ひそ葡萄に成りしもの高部波津なるんか

銀子 鈴 買ハむ 良 ち 海 芭蕉

柗笠より高伐屋つとつあき大塔の名酒酒
乃流ぬしと人路銀子鈴買しんとなるん是竹の
見替竹なるんか

左下 橋 伐すの次 收阜山 野水

燒蛤の業名と定るたに橋伐すのし右に
收阜山伐入つてはあなるんか

冬々の日白解

東人新山日記

喜林

村上知三郎
智田信之丞

